

インドネシア・ニアス島 地震救済活動記



青森産業保健推進センター産業医学担当相談員
弘前大学医学部公衆衛生学助教授
国際緊急援助隊医療チーム副団長

朝日茂樹

「マーシー1」（米国海軍病院船の名）は、われわれにとって最後の治療手段を意味した。津波災害の復旧努力が続くインドネシアに追い討ちをかけるように3月28日北スマトラの孤島ニアスでマグニチュード8.7の地震が発生。多数の家屋が全壊し死傷者2,600名以上となった。

日本政府は直ちにJICA国際緊急援助隊医療チームを2次にわたり派遣、4月15日まで延べ1,953名の患者を診療した。医療チームの派遣は1983年以後これでもう40回目になる。地震災害医療の特徴は、早期は倒壊物や瓦礫による打撲、骨折、裂傷など直接的な外科的疾患が中心、以後、次第に生き延びた被災民が生活環境の悪化により体調を崩しさまざまな疾患で来院するというのが共通パターンだ。

隊員のひとりが午前の診療予約券をもらえず生後2ヶ月の女兒、バレンティヌスちゃんを抱いて炎天下にボツンと佇む母親の姿を見つけたのは診療日の二日目の朝だ。ベテランのチーフナースが呼吸状態の悪化に気づきすばやく処置室に引き入れた。胸とお腹がまるでシーソーのように交互に膨らむ呼吸、WHOがレントゲン無しで診断してもよいという重症肺炎の兆候だ。口の周りはすでに紫色で血の気が失せている。救急救命士が蘇生ボックスを持って飛んでくる。間に合わないので、お尻に蘇生薬を筋肉注射し直ちに口対口の人工呼吸を開始する。救命救急センターの看護師が糸のように細い血管の確保に成功して救命薬品の点滴が始まる。人工呼吸と救命処置を続けながら私の頭の中はどんどん寒くなっていった。

緊急援助隊は中等度までの外傷処置、内服治療などの外来医療が中心で入院を必要とする患者は応急処置後、現地の後方病院に紹介や転送するのが原則だ。ところが孤島の二つの病院は被災し十分機能していない。民間機を乗り継いで行く緊急援助隊は、重量や容量の制限などから人工呼吸器はおろか酸素ボンベも持ちあわせていない。それでも総重量2トンの医療資機材、ジュラルミンボックスなど約100個をそろえて48時間以内に辛うじて出発しているのが現状だ。その一方で最近の派遣では日本の高度先端医療を期待して重症患者が運ばれてきたり、紹介されてくる例が急増しているのだ。

外務省の望月団長がマーシー乗艦の医師二人を連れてきた。援助機関の合同調整会議にて数日前から米海軍病院船がニアス島沖に停泊しているという情報を得ていたからだ。「マーシー受け入れOK」の無線連絡の後、アメリカの小児救急医と共に人工呼吸と救命処置を続けながらラグビー選手のように二人で突進、米海軍のヘリコプターに乗り込んだ。着艦して貨物室のような昇降機の扉が開くと、ニアス島では決して味わえなかった快適な冷気と共に映画ERのような光景が飛び込んだ。最新設備の救急病棟が目前にあり、手術衣姿の専門医と救命スタッフが10名ほど待ち受けてくれたのだ。

乳児救った人工呼吸

朝日助教授(弘大)ニアス島で活躍

地震被災者支える



重症の肺炎の乳児に人工呼吸する朝日助教授(JICA提供)

三月十八日星洲したスマトラ沖地震の被災地インドネシア・ニアス島で、政府の国際緊急援助隊医療チーム朝日助教授として派遣されている朝日大学医学部の朝日助教授が四月七日、重症の肺炎で自力呼吸できない後二月の赤ちゃんの命を救った。迅速な治療と、米朝日助教授チームとの連携が実ったもので、援助隊事務局の国際協力機構(JICA)東京本部は「朝日助教授を中心としたメンバー一丸の活動の成果」と報告している。

医療チームは三月三十日に一夜渡り派遣され、朝日助教授は四月七日、十七人で構成する医療チーム二次隊として現地入りした。けがや下痢、肺炎などで苦しんでいる患者の治療を、テント内の診療所で行っている。水道は壊れたまま、電気が十日にやったり一部復旧するなど過酷な環境下で、一日約百五十人の被災者が訪れるという。

JICAによると、十二日、診療所に重症の肺炎の女児が抱え込まれて運ばれてきた。医療チームは米海軍の診療船への搬送を要請することにも、朝日助教授が約三十分間、赤ちゃんの細い血管に点滴を垂らし、たんの吸飲や人工呼吸など懸命な治療を実施。ヘリコ

プターで乳児を病院船に搬送したという。乳児はすぐ病院船内におり、現地の総合病院の小児科医から主治医を受付けられているが、搬送は安定しているという。JICA東京本部は「今回のように緊急治療と輸送との連携により子どもの命を救えた事例は珍しい」と朝日助教授らの積極的な対応をたたえている。

▲平成17年4月14日 東奥日報(朝刊)

患者を引継いだ後に、艦内を案内された。手術の際の揺れを最小に抑えるためにまず大型タンカーを選び、船体を二つに切って病院船に改造したという。12の手術室、80の集中治療ベッド、CTスキャン、検査室、大食堂、図書館まで備え最大1,000名の入院患者に対応できるという。スマトラ津波災害後の2月に派遣されて以後9,700名を診療していた。驚いたことには、そこには常動軍医50名のほかに多くの民間人の専門医が乗り込んで診療に当たっているという。パートナーの小児科急医はマサチューセッツ医科大学の教官で民間人だった。バレンティヌスさんは集中治療にもかかわらず5日目に亡くなった。派遣期間中に同様の重症児2名を紹介したが、こちらは共に救命した。大型病院船の派遣は災害早期には間に合わないがその容量と設備は高次救命医療にも災害後半期に急増する生活環境の悪化に因る疾患にはほぼ完璧に対応できるし、ヘリコプターも搭載できる。災害救援に必須の輸送、通信手段などが提供と共に専門家も多数派遣できる。維持管理費などの問題はあがるが、アジア太平洋地域の大規模自然災害が多発している現在、このシステムは検討してみる価値はあるのではなかろうかと思った。